
Remix [Modern literature, perhaps. Remix]

unbelievable_kazoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空中楼阁 Remix 「Modern literature ,
perhaps . Remix」

【Nコード】

N1749U

【作者名】

unbelievable | kazoo

【あらすじ】

― 求む、工員。 空中楼阁建設事務所まで―
求職中の私は電信柱に貼られていたこの求人広告に目を奪われ、空中楼阁を探し求め始めた。空中楼阁とはなんなのか、空中楼阁のことを考え、それに振り回された私の一日。

作者からの注意

原作は安部公房『空中楼阁』です。

『空中楼閣』の内容を一部使い、私なりにアレンジをして別の作品を創作するということに挑戦してみました。

原作の詳細 安部公房『空中楼閣』

『水中都市 デンドロカカリヤ』（新潮文庫）に内

蔵

（前書き）

原作は安部公房『空中楼閣』です。

『空中楼閣』の内容を一部使い、私なりにアレンジをして別の作品を創作するということに挑戦してみました。

原作の詳細 安部公房『空中楼閣』

『水中都市 デンドロカカリヤ』（新潮文庫）に内蔵

二次創作の分類に入るかどうかの判別が難しかったので、こちらに掲載させていただきます。

墨田区のハローワークから帰る途中、電信柱に一枚の貼り紙が貼られていた。

― 求む、工員。空中楼阁建設事務所まで―

私は墨で書かれたこの張り紙に目を奪われ、電信柱の前で佇んでしまった。空はどんよりとした雲に覆われている、桜の花びらが私の足下にまで吹き付けてきた。ハローワークのどこか近くにある桜の木、それがほぼ散り始めたことを私は知ったつもりになる。それが、大した時間、あれから二週間足らずしかまだ流れていないのに、私を焦らせてくる。――桜が散ると、次に何の花が見ごろになるのか、知っているかい？ そんなことも知らないのか、駄目だね最近の若者は、一般教養ってものがないね、君は――

ハローワークの中は明るく、常に清潔感を漂わせている場所だから、そのことが私の下らない自尊心をグチグチと傷つけていくことに、そして私は億劫になる。いつその自尊心を笑い飛ばすだけの職員がいれば、まだ気は楽になるかもしれない、だが彼らとはそこまで仲が良いわけでもなく、私はありもしない想像を働かせながら、黒いベンチで自分に与えられた番号が呼ばれるまでただ待ち続けるのだ。

私はこの黒いベンチに座ると、尻の下に画鋏が仕込まれていたような気持ちになる。天井のライトは、せめて私を明るく照らしてやるよ、そう言っている気がしてならない。そして、アナログ時計が語る、お前は負け組になったんだよ、と。10時10分のアナログ時計が笑顔で私を見下す、私は手に汗を握りながら、そして心の中でかぶりを振る。そんなはずはない、私はまだ有意義な人生を送れ

るはずなんだと。

私の番号が呼ばれた。窓口にいる私と同年代ではないかと思われる若い男性が屈託のない笑顔を浮かべた。

背もたれのない椅子に私は座らされ、ああ、二者面談が始まる。

事務的な言葉、積極的な意見、消極的な回答、沈黙と苛立ち、そして無機質なアラーム。

「また、来て下さいね。あなたに合う職があればすぐにでもご紹介しますから」

就職難で失業者が世の中に増えてしまったため、ハローワークには常に人が押し掛ける。そのため一人に対する相談の時間は決められてしまった。若い男性は嫌みの無い笑顔を浮かべて頭を下げた。私の方が頭を下げるべきなのに、私はそれに答えもせず、そこを後にした。それがまた、億劫な気持ちにさせる。

そんな気持ちを抱えながら、私はこの電信柱の貼り紙に引き留められたのである。

― 求む、工員。 空中楼阁建設事務所まで ―

空中楼阁という摩訶不思議な言葉よりも、『求む、工員。』にばかり目がいつてしまう。貼り紙に書かれていることはこれだけで、事務所への連絡先は一切書かれていない。

だが、私にはこの貼り紙が、何か運命的な出会いにしか思えなかった。そして、運命的な出会いだと心のどこかで悟ったとき、そこで初めて『空中楼阁』という言葉の真意について頭の中で考えを廻らすことになった。だが、それよりも『求む、工員。』という言葉が私を魅了するので、私は結局この『空中楼阁』について調べることは『求む、工員。』という言葉と同意的な意味合いを持つとしか考えられず、私は空中楼阁建設事務所を探すことに決めると、私はその貼り紙を電信柱から綺麗に引き剥がしていった。

爪を立てて引っ掻き剥がした左上の角の部分が少し破けてしまったものの、文字が書かれているところに傷が付くことは無く、思ったより綺麗に剥がせたことに私は久しぶりの優越と満足を味わった。こうなると、ますますこの貼り紙が運命的なものに思えてしまう。他人に見られぬうちに私はこの貼り紙をさつさとカバンの中に仕舞いこみ、そして急いで借り住まいのアパートに戻ることにした。

アパートの自室に着いた私はさつそくその貼り紙をカバンから取り出した。そして、その貼り紙の裏を見た。何か書かれているかもしれないという期待は裏切られる結果となったが、それがまた良い。ここで何か詳細が書かれていたら、私はこの貼り紙に失意を感じ、そして興味を失っていただろうと私は思った。連絡先など書かれてない方が良い。空中楼阁についての詳細なんか、以ての外だ。その方が、何か神秘的な閃きを与えてくれるような気がしてならず、それがまた私に運命というものを感じさせる。考えれば考えるほど、ここが私を待っている気がしてならないのだ。

だが、私はここで少し我に返った。この貼り紙は偽物、つまり誰かが面白半分に電信柱に貼っただけのイタズラかもしれないという考えが頭の中を過ったのだ。なるほど、それも有り得るかもしれない。

だが、こんな胡散臭い貼り紙を電信柱に貼るというイタズラをこの現代で行う輩がいるであろうかと私は考えた。マスコミが不景気だ、就職難だと騒ぐだけ騒ぐわりには、この日本には実に多くの求人情報が溢れかえっている。だが、それでも何故か働けない人がいるのも現状である。資金に余裕のある会社は広告費を出せるために求人雑誌に求人情報を載せる事が出来る。では資金も無いのに人材が欲しい会社はどうすれば多くの人に求人情報を伝えることが出来るだろうか。

その答えの一つが、この事務所の手口として現れたのかもしれない。なるほど、電信柱にビラを貼るというのは、多くの人目に付き

やすく、さらに無駄なコストもかからない。しかも、求人情報というのは、残念ながら求職者としかリンクしない性質を持っているが故に、その情報が世間に伝播していくという性質まで持ってしまうのだが、ここまで一目惚れをさせるキャッチコピーがある求人広告となると話は別になるのだ。

― 求む、工員。 空中楼阁建設事務所まで ―

私はこのキャッチコピーのセンスの良さに惹かれたのかもしれない。あるいは、求職中だからこの貼り紙に惹かれたのかもしれない。あるいは、私が週に二回以上、この道を通ってハローワークに行くのだが、それを知っていたこの事務所の社員がわざわざ私のためにこの貼り紙を貼っておいてくれたのかもしれない。いや、もしかしたら私ではない、他の求職者のために貼ったのかもしれない。

そもそも空中楼阁とは何だ。それよりも、『求む、工員。』という字をわざわざ筆と墨を使って書いた理由は何なのだろうか。それがこの事務所に勤める社員の誠意を表しているというのだろうか。だが、その理由がいずれにせよ、このキャッチコピーを一度でも読んでしまうと、なかなか頭から離れなくなるということだけは確かなのだ。

頭から離れないというのは、その情報がより広大に伝播する可能性を増幅させる効果がある。例えば、この道を何となく歩いていた主婦がこの貼り紙を見た。これが例えば『アルバイト募集。○○コンビニまで』と書かれていたらどうだろうか。その主婦は、なんだ毎度おなじみの求人か、というぐらいにしか思わず、そこで情報は途切れてしまう。連絡先がそこに書かれていたらなおさらのことだ。その主婦が求職者でない限り、または夫が求職中でない限り、その貼り紙のことはさっさと忘れてしまうに違いない。

だが、これが『求む、工員。 空中楼阁建設事務所まで』と書かれていたらどうだろうか。何かしら思うに違いない。多分、せせら笑

うだろう。その主婦が真面目な方だったら馬鹿馬鹿しいと言って腹を立てるかもしれない。しかし、その情報は主婦の頭の中に必ず残ることになるだろう。なぜなら、その貼り紙によって感情を動かされたからであり、しかもそれが毎度おなじみのことではないことで起きたことであるからである。

頭の中に残った情報は、その情報が奇異な物であればあるほど頭の外に出たがるものである。だが、頭の中、いわゆる脳だろうが、それは覚えて考えることは出来ても話すことは出来ない。話すのは口の仕事である。だから、口からその情報は発信されることになるだろう。

ここで、主婦が初めて貼り紙を目で見たことによって得た情報が、その主婦の口で他人に伝えられるという目から口への情報のトランスレーションが行われたことにより、やがてその情報が口から他人の耳に流れて脳へ侵入し、そして伝えられた人がまた誰かに口で伝え、そして誰かはそれを見たことも無いのにその貼り紙を見た事があるような錯覚を覚えることになって（というより脳が見たがるのだ、その貼り紙を。それは想像を働かすので、さも脳が見たような感覚に陥って）、また誰かに口で伝えるのだ。

こうなると、大したコストを掛けてもいないのに、大手の求人雑誌に求人情報を載せたような効果、いや、もしかしたらそれ以上の効果が得られているかもしれないではないか。この求人広告はいずれ、世に広まる結果となるのだ。

そう考えると、私はこの貼り紙を誰の許可も得ずに剥がしてしまっただが、これは私にとって最善の策であったことのように思えた。私がここで携帯電話を取り出して、一枚写真を撮ってそのまま立ち去った場合、他の誰かがこの貼り紙を見て、私しか知らなくても良い情報が数日のうちにこの世間に広まってしまっているかもしれない。そうになると、多くの求職者が興味本意だけでこの事務所の門戸を叩きに行くに違いない。それは、多くの求職者が増えることになり、数の倍率の問題だけ考えても、私が就職する障害になるこ

とだろう。だから、私がさっきこの情報を独り占めに出来たことは、私にとって最善の策になるに違いない。

思いだすと、ハローワークに向かう時はまだこんな貼り紙は貼られていなかった。とすると、この貼り紙はまだ世間に広く知れ渡っていないはずであり、もしかしたら私が最初に見かけたのかも知れない。だとすると、これは私しか知り得ない情報となる。私しか知らないということは、私がこの事務所に辿り着いた場合、私は間違いないそこで工員として働くことが出来るだろう。煩わしい倍率など気にすることもない。私だけが選ばれて、いや私がこれを自ら選んでここまでたどり着いた。これは、もう運命的な出会いからの成就と考えても良いのではないだろうか。

センスの良いキャッチコピーで人を惹きつけ、少ない広告費で多くの人に情報を届けるだけの方法を知り得ている会社が、不況という荒波だけのせいで倒産するだろうか。いや、それよりも空中楼阁というものを建設する方法をこの日本で知り得ている会社があるだろうか。そんな建設会社など今まで聞いたことないではないか。

そもそも空中楼阁とは何なのだ。錦糸町駅のホームから見える東京スカイツリーよりも高く建設される楼阁のことだろうか。いや、それでは空中とはいえない。もしか、そのスカイツリーの上空にさらに建設する予定なのだろうか。いや、それは物理的に不可能ではないか。では、もしかや巨大な飛行艇をまるまる一つ作りあげて日本上空に新たな都市を作りあげるつもりだろうか。いや、もしかしたらただ単純にスカイツリーよりもはるかに高い塔を日本ではないどこかの国、例えば中国やドバイに建設するつもりなのではないだろうか。

いつの間にか貼り紙のことではなく、空中楼阁について私はこの時になって始めて考えたのだが、どの空想も実現は無理ではない気がして仕方がなかった。見たこともなく、建造されたこともないこの空中楼阁を、いつかこの建設事務所の工員として働く私が、この手で空中楼阁を造り上げた時の達成感、そんな得たことも無い達成

感を錯覚するまで想像は膨らんでいき、その喜びを独りで感じて満足に浸るまでに至っていた。

私はこの建設事務所を探し求めることにした。無いかもしれないこの事務所を私は必ずあると信じ込むまでになっていた。いや、ある。必ずあるように思えて仕方がないのだ。だって、そうだろう。ハローワークに登録されている会社が必ず実在するだろうか？ 求人情報に乗せているだけの会社だって数多く存在するではないか。電信柱に貼られていようが、ハローワークに登録されていようが、情報の質は同じではないか。（はつきり言ってこの意見は間違っているのだが、私はこの運命的な出会いを誰にも否定されなくなかった）

私はさっそく自室にあるデスクトップのパソコンを起動させ、webに繋ぎそして検索サイトの検索欄に『空中楼阁建設事務所』と打ち込み、そしてenterキーを押した。

検索結果の一番上に『安部工房 — 空中楼阁 —』という文字が書かれていた。私は眉を曇らして画面をにらみつけた。こんな簡単に検索に引かかるとは思っていなかったからである。私にとって検索に引つかからない方が、まだ幸せだったのかもしれない。

不審に思いながらも私はそれをクリックした。開かれたページは、どこかの誰かが運営する読書感想文を書き連ねるだけのブログだった。

その結果、私はこの『空中楼阁』というものが、安部工房の偶想小説のタイトルであり、そしてそれが昭和二十六年に発表された作品であることを知った。そして、そこには『空中楼阁』の言語的な意味も余計に書かれていた。

その時、私が今まで思い描いていた空中楼阁の建設という夢が、タッチノコやエリマキガエルを信じ込む子どもの夢と大して変わらないことに気が付いてしまった。そう、素直に考えてみても、空中に楼阁を建てることなど無理なのである。

私はパソコンの前で落胆して肩を落とした。知らぬ方が良かった

かもしれないという思いが心のどこから沸き上がったのだが、下らない自尊心によつてそれはすぐに消し去られ、心に残った思いは小さい羞恥心と、それでもまだ信じたいという薄弱で儚い望みだった。つまらない、どうしてこんなに夢のない世界になってしまったんだ。

――浅はかな奴め、だからお前は就職出来なかったんだよ――そんな言葉が耳を過る、私はこの一連の過ちを早く忘れたくて、けれども家にいても思い出すだけでそれが煩わしくて苛立つて、だから私は財布にある千円札が数枚あることをなんとなく確認すると、なんとなく家を出て駅前のパチンコ店に向かっていた。

数時間後、私は財布の中身を全て失くして帰路につく結果となった。遊戯している途中で今日は負けても良いと思いつながら、先ほどの思いを消せるならばそれで良いと思いつながら、そうしているうちに全ての金を使い果たした。そして負けても良いという思いの裏には常に棚からばた餅を期待する思いがあった。その思いに気が付くのは、こうして全ての金を使い果たしてからであり、結局それは私が空中楼閣の存在を未だに信じ込んでいる思いと絡み合つて、私はコンビニに寄るとクレジットカードを使って缶ビールを数本買い、そしてちょうど陽が沈んだ頃に自宅で独り私は酔いつぶれたのだった。

空中楼閣――空中に楼閣を築くような、根拠のない物事。架空の事物

広辞苑 第六版より引用

意識が戻り始めた頃、けたたましく鳴る機械のアラーム音が聞こえた。寝起きである私はまだ意識が朦朧としており、カーペットの上で横になっていた私はゆっくりと体を起こした。鳴りつづけるア

ラーム音はあまり聞いたことのない音だった。私は何の音だろうと思ひ、時計を見ると夜中の１１時を過ぎたぐらいだったので、さつさとアラーム音を止めて布団に入ろうと思ひ、私は音の鳴る方へ歩いて行つた。

その音の出所は早くも分かつた。それは自宅にとりあえず設置されていた電話機からだつた。電話機のライトが音と呼応して点滅していた。

私はそれを知ると不愉快な気分になり、同時に多少の不安が靄となつて心に絡み付いた。静まりかえる夜中に突然電話をする奴がいることに私は苛立ちを覚えたが、夜中の電話はとにかく気味も縁起も悪い。もしかしたら親戚、友人の訃報かもしれない。だが、そうだとしたら、私の携帯電話に掛けてくるに違ひない。

ディスプレイには電話番号が表示されておらず『公衆電話』と書かれていたから、私は余計この電話に対して警戒心を持つた。電話の前で数秒待つてみたが、鳴り止む気配はなさそうだった。呼び出し音はひっきりなしに鳴り続けている。電話機の前で我慢くらべをいつまでも続けても仕方がない。

私は受話器を取り「はい、もしもし」とだけ言つた。

「ああ、繋がつた。いやあ、良かった。名倉さんの家でよろしいですか？」

若い男の声だった。「はい、そうですけど」と私が返すと、相手は要件をさつさと伝えたいのか、さつきより少し早口になつて言つた。

「突然の電話、申し訳ございません。私、空中楼閣建設事務所に勤めております、原田とも申します。この度は名倉さんに工員として勤めてもらえないかという催促の電話なのですが、この後、今すぐにも、時間がありますでしょうか？」

私は相手が何を言っているのか一瞬分からなかつた。空中楼閣という言葉聞いてあの『求む、工員』と書かれた貼り紙を思い出し、まるで狐につままれる思いをして言葉を失つた。あれは嘘ではなか

ったのか？

「あのう、名倉さん？ 聞こえていますでしょうか？」

私はとりあえず返事をした。

「ああ、聞こえています」

「それで、時間はありますでしょうか？」

「いや、それよりも、その空中楼阁というのは嘘なのではないでしょうか？」

私は相手に失礼の無いようにおそるおそる聞くと、少し間が開いて返事が返ってきた。

「嘘、と申しますと？」

「いや、だから實在しないでしょう。その空中楼阁もその建設事務所も」

「はあ。ですからこれから建設するのですよ。何を言っているのですか」

「いや、そうではなくて、空中楼阁なんてものを建造できるはずがないかと」

私がそう言うと、突然相手の笑い声が聞こえてきた。そして笑ったことに対するお詫びを軽く述べて、言葉を続けた。

「いやあ、最初に話を聞いた人は皆そう言うのです。でも、建設中の空中楼阁を見るとその思いもいっぺんに吹き飛ぶみたいでして、その後は工員としてきちんと勤めて下さるのです。工員一同、よくお勤めになって下さって本当に助かります。」

私も入社前はそうでしたからお気持ちはいく分かりますよ。私は三年前にこの事務所の社長、つまりは創業者の方からお声を掛けて貰いそして入社したのですが、入社する前はあなたと同じで絶対に無理だと馬鹿にしたものでした。空中に楼阁など造れるわけがないだろう。どこに土台を敷くのだと。素直に考えてもそれが当たり前です。

しかし、その設計図を見せられた時に驚かされましてね。私は大学で建築学を専攻していたので設計図を読み取るのはそれなりに自

身があるのですが、なかったのですよ。その設計図に穴という穴が本当に造れるかも知れないと思わせるような設計図がそこにあったのです。

でも、私も結構疑り深い性格でして、だから見せてくれと言ったのです。その空中楼閣の建設現場をと。

そして連れて行かれたところで私が見たのは、空中楼閣の土台となるものでした。呆氣にとられました。そのでかさに。そしてその緻密さに。

そこで改めて社長に頭を下げられたのです。どうか共に協力してくれないかと。私は『はい』とだけ答えて、それからこの事務所で世話になっているのですが、

いやすみません。どうも、私個人の思い出話になってしまいました。

公衆電話からそちらに掛けているため、もうそろそろ電話が途切れてしまいます。もう一度電話を掛け直すのもそちらの御面倒を被ることになりますので、ここでとりあえずの御返事を貰えると嬉しいのですが。宜しければ、今から空中楼閣の建設現場に御一緒に向かいませんか？」

「はあ、しかし。もう夜も遅いですし。明日というわけにはいかないでしょうか」

私が戸惑いながらそう言った。

するとその若い男は「構いませんよ」と明るい声で返し、そして少し遠慮深いような、声のトーンを少し落として言葉を続けた。

「ですが、建築工事が行われるのは基本的に夜から明け方までですので、明日訪れるとしても結局、この時間帯になるかと思われます。私どもも欠員が出てしまった穴を早く埋めたいという内部の事情がございます、もし興味があるのならば早めのお返事をして下さると助かるのですが」

「どうして、私がこの空中楼閣に興味があると知っていたのですか？ それとどうしてこの電話番号を知っているのですか？」

「いやあ、それは何とも正直にお伝えして良いのでしょうか。時間も無いのでかいつまんで言いますと、あなたが私どもの貼り紙を持ち帰るところを見てしまいました」

私の頬が熱くなるのが分かった。見られていたのかという恥ずかしさからだった。

「いや、本当にたまたまなのです。ですがそこまで興味がある方を無視するわけにはいきません。ですので、誠に申し訳ございませんが、後をつけさえて頂きまして、そしてこうして連絡させて頂いたのです」

「そこで声を掛けて貰えば良かったのに」私は少し尖った口調で言った。

「ですが、そこで声を掛けても、わざと知らないふりをする人も多いのです。無礼なこととは思いました。申し訳ありません。ですが、だからこそあなたのような方と共に空中楼閣を造りあげていきたいのです」

私は返事を渋った。果たしてこの男の言うことをどこまで信じても良いだろうか。本当に空中楼閣を造り上げる会社がこの世に存在するだろうか。もしや、新手法の詐欺集団ではないのだろうか。

すると私の思いを見透かしたかのように若い男が言葉を発した。「色々とお考えになることもあるかと思いますが、やはり一度見て貰った方が何よりお互いに御納得できるかと思えます。どうでしょう、これから御一緒に行きませんか？交通費等々、その他掛かる経費はこちらで全て負担しますし、返事はそれからでよろしいので」

確かにその通りなのだが、それでも何か引っかかる場所も多い。そもそも空中楼閣などあり得るのか？

だが、もしそれが実在できるのならば見てみたい。まだ私が空中楼閣の存在を信じていた時に描いた空想、それが本物かどうか知りたい。見てから断ることだって出来る。

私は「分かりました」と言って、若い男の提案を引き受けた。さ

つそく私の住むアパートの前まで迎えに行くと言に残し、そして丁重な言葉で電話を閉めくつた。私はさつさと外に出られる姿に着替えてその上から薄いコートをはおってその若い男を待った。

十分後、呼び鈴が鳴った。玄関先にはさっきの電話の相手だと思われるスーツ姿の若いハンサムな男が立っていた。

「改めまして、空中楼阁建設事務所に勤めております、人事部所属の原田と申します」

そう言つて彼は頭を下げ、そして私に名刺を渡した。

「それではさつそく行きましょう。空中楼阁の建設現場へ」

そう言つて彼はアパートの前に止めてあつたタクシーの方へ私を案内した。ふと見上げると、昼間の空に敷き詰められていた雲はどこかへ風で流されていったらしく、空にはいくつかの星が輝いていた。だが、四方を見回しても月はどこにも見当たらなかった。しかし、私は見当たらない月のことなどすぐに忘れ、見える星たちに空中楼阁に出会えることへの願いを心の中で行つたのだつた。

そうして後部座席に一人案内された私はそのまま建設現場に連れて行かれることになつたのである。後部座席の窓は全て真つ黒なプラスチックで塞がれていた。外からの光を一切通さず、タクシーの天井に点いている黄色い明かりだけが私をうす暗く照らしていた。私の両側にある窓から外を見ることは出来ず、私がその理由を聞いても、原田は何も答えず、運転手としきりに話をしていた。

そうしているうちにタクシーが動きだした。すると会話はパタリと止まり、不気味なほどに静かになつた。私は移り行く景色が分かる前方だけを眺めていた。街中の明るい照明ばかりのせいで、空には星も見えなくなった。街の照明にも負けずに光を放ちながら存在を証明する月のことを何故か恋しくなり、此処から一目だけでも見えるといいなと思う自分がいた。

やがてトンネルをいくつか抜けて、工場と煙突がいくつも連なつて建っている団地が見えたかと思えば、大きな橋を渡り海か川を越

え、目まぐるしく移り変わる前方の景色に目が追いつかず目が疲れて眩暈を感じ、気分が悪くなって手で目を覆い顔を少し上げて口でゆっくりと呼吸をし始めていた頃、ちょうどタクシーは目的地に着いた。私にとって、これが人生初めての車酔い体験であり、一昨年の春に死んだ父のことが何故か急に頭を過った。

「お疲れ様でした。さあさあ、着きましたよ。わが社の建設現場に」
原田はたぶん笑顔でそう言ったのだろうが、今の私はその笑顔に答えるだけの気力はなかった。もしここで父が隣にいたのなら「しつかりしなさい」とでも強い口調で言われたのだろうか。原田の顔を見ることなく弱弱しい声で私は便所の場所を聞いた。原田は「ご案内しますよ」と少し臆して言って、私のことを少し早足で便所に連れて行った。小さな公園で良く見かける、ドアを開けたらすぐに便器が目の前にある狭いトイレに私は連れて行かれ、和式便器を目の前に見た瞬間、私はそこでゲロを吐いた。タイル張りの狭い便所に臭気が漂い、その酸っぱいような臭いでまた吐き気を催し、さらにゲロを今度は便器の外側に吐いてしまい、私は腹の物が無くなるまで吐き続ける格好になった。ゲロをさっさと水で流し、私は出来る限りの早さで便所から出た。

原田が持ってきてくれたペットボトルに入った水で口を何回かゆすぎ、口の中がある程度さっぱりしたところで、私はペットボトルに残った水を全て飲みほした。口の中にはまだゲロの味と臭いが若干残っていたが、先ほどよりはだいぶ楽にはなった。原田は苦笑いしながら、建設現場に私を案内しようとゆっくりと歩き始めた。

突然、大きな騒音が聞こえ私はその騒音がした方を向いた。

工事が再開され始めたようです。多分、原田はこんなことを言った。原田はまだ何かを言い続けているようだがすさまじい騒音のせいで原田が何を言っているのか、ほとんど聞き取れなかった。

多分、建設工事のことについて語っているのだろう。私も原田もその建設現場の方を向いていた。闇夜の中で見えたのは灰色のシートで四方を囲まれている、長方形の形をした巨大な箱のようなもの

で、その長方形を中心に設置された数多の照明が闇を照らしていた。とてつもなく大きいことだけが分かる、地上三十階、いや五十階建てだろうか、目測では分からないほどの高さがある長方形がこのさら地にそびえ立っていた。それ以外のものが全くないこの広いさら地で、私はそれ一点だけに目を奪われ、言ってみればその灰色の長方形にのみ込まれていた。

こんな物が都心から少し離れたところにあることに驚きだった。いや、あることではない、これくらいの建設現場は都心で見える事もある、もつと言うなれば、こんな物と関われることに驚きだった。この灰色の中で何が造られているのかは分からない、いや空中楼阁が造られているのだろう。そして工員になって、私がここでこの一員として働く姿を想像すると、先ほどまでの気持ち悪さはどこかに吹き飛んでしまうほど、胸が高なっていく様子が自分でも分かった。この灰色のシートの内部ではどのような物が造られているのだろうか、私はそれだけを思い、その巨大さに飲まれてただただ啞然として眺めていた。

原田が私の肩を叩き、現場とは少し離れたところにあるプレハブ小屋を指差した。そして「とりあえずあちらに行きましょう」と言うのと、私の返事も待たずにさっさとそっちの方へ歩いて行った。私も原田の後を追った。向かう先には小さな四角いプレハブ小屋があった。

プレハブ小屋の入口を抜けて電気を点け、ドアを閉めると小屋の中はある程度静かになった。それなりの防音は出来る小屋らしいが、それでも外からの騒音はある程度伝わってくる、ガラスがたまにビリビリと震えるのが見えた。小屋の中はわりと暖かく、小屋の奥に家庭用の石油ストーブが見えた。原田はそれにさっそく火を点けた。「どうもすみませんね、うるさくて。外じゃまともに話も出来ませんよ。ああ、どうぞその椅子にでもおかけになって下さい。いま、お茶をいれますので」

小屋の中央には会議室で頻繁に使われる折りたたみ式の長机が横

に二つくっつけて並列されており、その長机の外側にパイプ椅子が二つの机を挟んで三つずつ設置されていた。私は入り口から一番手前で左側、窓側にある椅子に座り、そしてこの小屋をなんとなく見まわした。蛍光灯が点いている天井は低く、背後には窓があつてそこから現場を眺められた。前方の壁際には自分の腹ぐらいまでの高さがある灰色で金属製の戸棚が三つ、右端から左端まで余すことなくきれいに詰められて設置されており、原田は一番左側の扉をスライドさせて開けると、そこからお茶のパックが綺麗に並べられて詰められている四角い紙箱を取りだして私の前に置いた。全てが一回で使い切る小分けの紙パックのお茶で、緑茶、紅茶、ほうじ茶、ウーロン茶など種類は様々にあつた。好きな物を選んで下さいとのことだったので、私は迷うことなく紅茶を選んだ。原田は先ほどの戸棚に戻ると、そこから今度は紅茶を飲むためのティーカップとスプーンを二人分取り出して私の前に一つ置き、もう一つを私と対面する席に置いた。

「もう少しでお湯が沸きますので」　そう言つて原田は電気ケトルが置かれている棚の方をちらりと向いた。そういえばここには蛇口も流し台もない。話のきっかけになればと思つた私は、そのことを原田に訊いてみた。

「水道が見当たらないのですが、どこから水を持ってきていたのですか？」

「工事で使う水は近くの川からポンプでくみ上げてホースを引いて使わせて貰っています。飲料水は近くのコンビニから買つてくればそれで済むので」

電気ケトルの方から電子音が鳴つた。原田はそれを持ってくると机の上にあるティーカップにお湯を注いだ。ティーカップには紐付きの三角ティーパックが予め入れられてあり、お湯が注がれると同時に透き通つた赤茶色の紅茶が透明なお湯を少しずつ浸食していった。

「お砂糖はいりますか？」

「いや、大丈夫です。それよりも、川から水を引いてよろしいのですか？」

「まあ、一応許可は貰っているので大丈夫かと思えますけどね。変な話、都もこの空中楼阁の建設には協力的なので」

何か濁したような言い方だった。原田はシュガースティックを机の上に三本置き、私と正面から向かい合う席に着いた。まるで個人面接のようだ。彼はシュガースティックを一度に全て封を切り、まだ色が完全にでない紅茶の中にいっぺんに入れた。スプーンでかき混ぜながら彼は話を始めた。

「私たちの建設している空中楼阁は、元々は都の計画の一つだったのです。近年、関東圏内で相次ぐ異常気象、とは言ってもゲリラ豪雨や突発突風、それに気温急上昇や最高気温38度を超す超真夏日ぐらいしか私には思い当たることはないのですが、これらの異常気象を前もって察知することで、異常気象に少しでも予防策を講じられるようにしようという考えが都議会議員の間で生まれたのです。しかし、そんなことは無理だ、とすぐに声を上げた公益団体がいたのです。どこだか分かります？」

原田は少し間を置いて紅茶を一口すすった。私は少し考えたのち、首を振った。原田が口を開いた。

「日本気象予報協会です。彼らは都議会議員のその意見に対し真っ向から反論を述べたのです。ですが、それは当たり前の意見で、都議会の議員たちは誰も反論出来なかった。

そもそも、天気予報など当たる方がおかしい、ということを御存じでしょうか？」

「いや、知りません。でも、天気予報なんて100%当たるだなんて誰も信じてはいないとは思いますが」

「はい、その通りです。だから厄介なのです。当たることが当たり前という中に、その考えを皆さまが持っているから厄介なのです。そして、国民の全てがそう言った考えを持っているとも限らない。ゲリラ豪雨や異常気象はこういった観念から生まれてしまったもの

だと、私は考えておりますし、日本気象予報協会も同じことを考えておりました」

私は返事をせずに黙って聞いていた。正直に言つと、この原田の言っていることが分からなかった。だが、原田は話を続ける。私は彼の言うことを何とか理解しようとして紅茶も飲まずに耳だけに意識を集中させた。

「毎日が異常なのです。そう考えると、全てが丸く収まるのですが、毎日が異常などということはありえません。異常は正常なことが続いている中に生まれるバグのような物ですから、私たちの生きている日常はとりあえず正常なのです。その毎日を正常と仮定して、その正常だった過去の毎日の気象データを統合、分析して生まれたのが、気象予報なのです。つまり、気象予報とは、過去のデータを統合したサンプルと現在の気象状況を照らし合わせて、最大近似値をはじき出した過去のデータを参考にして明日の気象予報を皆さまに提示しているのです。

けれども、そんなことを知っていても実生活には何の足しにもならないのですけどね。知る方にとっては、結果さえ当たればそれまでの過程などどうでも良いのですから。

では、それと空中楼阁とどんな関係があるかと思われるかもしれませんが。高度数千、数万メートルという上空にある大気の状態を瞬時に知り得ることが出来れば、もしかしたら100%に近い気象予報を瞬時に知り得ることができ、なおかつそれを知りたい側、つまり国民に伝えることが出来るかもしれない、と提言された研究者がいます。まあ、それがこの社長なのですけど、それを実現してみるための第一歩としてまず計画されたのが、この空中楼阁の建設なのです」

たんとんと話していく原田に対して、気象予報や建築についての知識が乏しい私は口を挟むことが出来ず、ただ相槌を打ちつつ黙って聞くしかなかった。原田の言っていることが正しいのか間違っているのか、そんなこと私に分かるはずがなかったが、聞いていて面

白い話だなと私は関心を持ち始めながら聞いていた。原田は私の様子をたまに伺いながら、それでも口を休めることなく話を続けていった。

「異常気象が目立ち始めた数年前に、空中楼閣の建設を社長が他の研究者の同志や気象予報士に公表したそうですが、誰も相手にしてくれなかったそうで、まあ、当たり前と言われたらそうなのですが、ただ、もしそれが出来るなら一番の解決策だということは皆分かっていたらしいのです。」

というのも、常に上空の大気の変化を瞬時に見極められる観測装置が開発されれば、異常気象が起きるメカニズムもすぐに解明されることでしょう。その解明されたデータと大気の状態を見比べつつ、もし大気の状態がそれに近付いているのなら、すぐにでも異常気象が起きることを予知しているので電波に乗せて国民に知らせることが出来る、という一連の流れが最も理想とする形式なのです。

が、それを実行するためには、はるか数千、数万メートル上空にその装置を設置して、なおかつその情報を瞬時に日本中央気象研究所に送り届け、なおかつ、そのデータをすぐに分析して結果を出し、それを公表するということになります。この流れを作り出すにはまず観測装置を作り出すことが必要不可欠なのですが、この装置を数千、数万メートル上空で風に流されないように制御あるいは上空に固定し、約半日間太陽光線を浴び続けることによる観測装置の温度上昇を抑える機能を備え、さらに上空を飛ぶ飛行機にぶつからないようにコントロールするなど、つまり問題点が多かったのです。

そして、それを解決するための方法は全く考えられていなかったのです。まあ、今まではあまり異常気象は発生しなかったのですが、ここまで真剣に考えなかったということもあるのですが、最近になっての異常気象の発生頻度はそれこそ異常であるらしく、それでついに日本気象予報協会に都知事や都議会議員も重い腰を上げて、その全ての問題点を解決することのできるこの空中楼閣の建設に乗り出したというわけなのです」

ここまで話を終えた原田はティーカップを手に取り、それをすすった。私もそれを真似るようにティーカップを手に取り一口だけ飲んだ。紅茶はまだ温かい、私が紅茶を飲んでいる間に原田は席を立ち、私の後ろにある窓の方へ近寄って行った。窓の外にはシートで覆われて中の様子が見えない巨大な建設現場の姿があった。

「あの空中楼閣が完成すると、空中楼閣の中に観測装置や通信装置といった機材が全て運び込まれることになります。空中楼閣の中にはもちろん人も入れますし、もっと言うなれば長期間居住できるようにする予定です。研究者や気象予報士が上空の大気の中でデータを長期間継続的に取り続けることが出来るとともに、上空の大気に起きた異常も瞬時に地上の研究所に知らせることも可能になります。そうすれば、私たちは更なる安全安心な生活を送るようになることも出来るようになるのです。」

それぐらい、この空中楼閣には可能性が秘められているのです」

原田はそう言いきった。私は返す言葉が無かった。

正直なところ、私は途中から原田の話についていくことが出来ず、原田の話をほとんど聞いていなかった。私は馬ではないが、まさに念仏を唱えられているかのような感じに陥っていた。

だが、ただ茫然としていた訳ではない。人間の脳とはどうやら完全に怠けるということをえらく嫌うらしく、私は聞かない代わりと言っては何だが、私は知らず知らずとこの目の前で建設されている空中楼閣についての想像をあれこれと頭の中で廻らしていた。この空中楼閣を気象予報のためだけに使うのは勿体無い、例えば、無線電波の中継基地にすることで今よりも早い速度で通信を取ることが出来るようになるのではないか、いつそのこと空中楼閣に人を住ませられれば、新たな不動産ビジネスが出来るようになるのではないか、そして、

「原田さん。その空中楼閣は軍事的なことにも利用できませんか？」

私は一番利用価値の高いと判断したこの思いつきを原田に先ほどの返事として言ってみた。原田は私の言葉に目を丸くした。

「それは、この空中楼阁を軍事基地にするということですか？」

手っ取り早く言うつもりになるだろう。私が「そういうことです」と頷くと、原田は「驚いた」とだけ言い、そして少し黙りこんで口を開いた。

「確かに可能ですが、それはだいぶ後の話になるでしょうね。今は軍事基地として使うならばあまりにも規模が小さすぎる」

「どのくらいの規模になるのですか？　いま、造られている空中楼阁は？」

原田はその返答に困ったのか、少し眉間にしわを寄せて閉口した。思ったより長い間、原田は口を閉ざして何かを考え込んでいた。私が「設計図は見られないのでしょうか」と尋ねると、原田は「いや、それは社内機密ですから」とだけ言っただけ首を振った。

やがて、原田はひとりでに頷くと、私に向かって言った。

「見に行きましょうか、その建設現場に。それが一番手っ取り早いでしょうし」

私は原田に賛同した。一刻も早くその空中楼阁を私は見たかった。というより、そもそもその空中楼阁の実態を私は確認するために深夜にわざわざここまで連れて来られたはずだった。それが、どうしてこんなところでお茶を飲むことになってしまったのだろうかと考えると、それは私が車酔いをしてゲロを吐いてしまったことに起因することを知り、私は自分に少し腹を立てそうになった。肝心なところで躓くのは親譲りの性格で、故に憎めない弱点でもあり、しかしそれが人生の要となるところで否応なく発揮されてきたことも思い出すと、いつかこんな自分にさよならしたいと懇願するのも、それもまたいつものことだった。

ゲロさえ吐かなければ、私はすでに空中楼阁と出会っていたのだろうか。

しかし、空中楼阁はもう目の前にある。一枚の貼り紙から膨らんでいた私の想像が、どこまで合っているか。

紅茶を一口だけすするともう温かった。その冷めてしまった紅茶

を一気に飲みほし、私は「行きましょう」とだけ言った。

プレハブ小屋を出て、私は少し距離を開けて原田の後について行った。

私は近付くにつれて、その建設現場が想像していたものよりはるかに大きいことを知っていた。原田の言っていた「小さい」という言葉にはつきりとした疑問を持ち、まだその建設現場は少し遠くにあるにも関わらず、私は首を高く上に傾けて歩くようになっていた。

近付くにつれ、私は言葉を失っていった。足取りが勇み始め、私の気分がだんだんと高揚していくことが分かった。まだ自分がこんな気持ちになれることが嬉しかった。

こんな気分を私は何度も経験したことがある。大学受験での奮闘や就職活動で奔走していた時、その企業について知れば知るほど、やりたいことが見えてきた時と似ていた。

しかしこの時の自分は、その大学受験や就職活動とは明らかに違う点もあった。最初から参加したかった世界を最初から見ることも出来ずに閉ざされるその時の自分の世界と、明らかに此処は違う世界だった。見たいと思う、参加したいと思う世界が目の前で見られるという、それだけで私はある意味では不気味と言っているほどの満足感と達成感があった。人生の賛歌を大声で独唱する歓喜とはこういうものだろうかと考えた。

そして、この時の私は酩酊感というものを理解していなかったのだろう。

ただ、自分の疑心というものを夢というものに置き換えていることに過ぎず、つまり空中楼閣が実在しないかもしれないという恐怖をなぎ払うために、私は空中楼閣に対して様々な可能性が秘められていると感じようとしていた、のかもしれない。

それは、砂漠に潜む蟻地獄にまで可能性を求め始めた難民のようだった。現に、その空中楼閣の建設現場まで歩いていく道には、草

木も見えぬさら地であり、その建設現場があまりにも明るすぎて、周りなど私にはいつさい見えなかったのだから。

しかし、私は気がつかない。そんな疑心も歩いている時はまだあった。

だが、それも建設中の空中楼阁を見た時に吹っ飛んだ。

灰色のシートに囲まれた四角い巨大な箱の中には、確かに空中楼阁の一部があつたのだ。

「社長！ 新しく工員として働いてくれる方がお見えになりました！」

原田が何か高い塔のような物を見上げている一人の男に向かって叫んだ。

「そっちに行く！ ご苦労！」

振り向いてその男はそう叫び、そして私と目が合った。小太りの中年のおっさんで、無精ひげが見えた。作業着を着ているその後ろ姿に社長という風格は見えなかった。

やがて、私の前にまでその男はやって来て私と挨拶を交わし、そして原田と二言、三言言葉を交わすと、原田は踵を返しそのまま出口へ向かってしまった。

「いや、すみません。工員希望の方がもう一人いまして、今から原田に迎えに行かせたのです。あなたも工員希望でよろしいでしょうか？」

私は「はい」とだけ返事をした。相手が社長というだけに体が少し萎縮していた。

「いや、そんなに硬くならなくてもよろしいですよ。この空中楼阁を見て、どう思われましたか？」

「いや、ものすごく大きくて、びっくりしたというか、なんというか」

社長は豪快に笑い声をあげた。

「そうでしょう。皆、そう言いますよ。それで、あなたはこの空中

楼閣を見て軍事利用も出来ないかとおっしゃったそうで」

私は身を丸くした。社長の癪に障ったのではないかと心配したからだった。そんなことまで原田は報告するのか。私は原田のことを少し恨んだ。

私が何とか弁明しようと言葉を探していると、男は言った。

「いや、別に良いですよ。私も最初は気象予報のために建築していましたが、別にそんなことに使われなくても良い気がしますね。もっと、国のためになることへ使われるなら、そっちの方がはるかに良い」

「私もそう思います」 私はその言葉に飛び乗るように言い放つと、そのまま流れに任せて言い始めていた。

「これだけの楼閣が空中に常になれば、日本の空の平和は間違いなく守られるはずです。有事の際の制空権もすぐに取れます。通信手段も思いのままにすることも出来ますし、それに気象観測も即座に出来ますし、それに対空ミサイルの精度も抜群に上がります」

私はさらに言葉を続けようとした。いつのまにか緊張から興奮に変わっていた。

だが、男は私の話を止め、そして言った。

「お気持ちは分かるが、さすがに軍事利用は無理だろうな」

確かに現状では無理だろうと私は思った。

「だが、いつかその時が来るかもしれん。君もこの空中楼閣に携わってくれないだろうか？」

「もちろんです！」 私は声を張り上げて言った。

「そうか。実は、今日にでも空中楼閣は出来上がる。他の建設所で造られたエンジンや部品を踏み立てるだけでな。明日の早朝にでも政府の許可が下りれば試運転となるのだが」

社長が私の方をもう一度見た。

「乗ってみないか？ これに」

私はこの言葉に肝を抜かれる思いをした。

「どうだね？ もちろん私も乗る予定だ。それに他の工員たちもだ」

「いや、良いのですか？」

「ああ。そこまでこの空中楼阁に夢を持ってくれているのなら、実際に触れてみるのも良いだろう。この工員たちは作業はやってくれるのだが、そこまでの奴らばかりでな。まあ、こいつの使い道を考える奴が少なすぎる。乗って、新しい使い道を思いついたら教えてくれ」

「ありがとうございます！」と私は言って頭を下げた。男は「それじゃ」とだけ言い、そのままさつきいたところに戻って行った。

興奮が冷めやめぬまま、私はその後すぐに私のところにやって来た男に今晚過ごすための宿舎までに連れていかれた。宿舎は三階建てで、宿舎の玄関口はうす暗く、玄関から先には人がやっとすれ違えるだけの狭い廊下が一本あり、廊下の左側に部屋の入り口となるドアがいくつも連なっていた。一番奥から二つ目の部屋に私は案内された。ドアを開けると、窓の無い広さ三畳くらいの粗末な洋室があった。だが大の字になっても寝られるスペースは充分にあり、普段、私が住むアパートもタンスやテレビなどを置くのだいたいこのくらいの広さになるのでたいして苦にはならなかった。

部屋の中央に座ると疲れがどっと出たのか急に眠くなり、私は布団も引かずにフローリングの上に横になると、コートも脱がずにそのまま寝てしまった。

何やら騒々しくてうつろうつろとしながらやつと目を覚ました私は、外側からドアをしきりに叩かれていたことにその時になってやっと気付き、急いで起きあがると何の用心も無くドアを開けた。開けると、そこには見知らぬ白髪混じりの背の低い男がいた。

「さつさと起きてくれよ。そろそろ出発なんだから」

その男は私と目を合わせるとそう言い、そのままそこを後にしようとした。私は何のことか分からずその男を引きとめた。「空中楼阁に乗るんだろ、お前も」と男は言って、そのまま走り去って行き、

廊下の途中で足を止めると振り返って私に向かって叫んだ。

「モタモタしてると乗り遅れちゃうぞ！ 出発まであと十分もないんだからな。社長がオロオロしながらお前のことを探してたぞ！」

私はそれまでのことをはっと思いだすと、先ほどまで寝ていた部屋を一度だけ見た。どうせ忘れる物など何も無い。急いでその男の後を追った。男は私が後を追う気配に気がついたのか、足を止めて私が追いつくまで待つてくれた。

「配管工事をしていた矢雲だ。お前は？」

自己紹介をしようと思ったとき、突然どこからか耳が痛くなるほどのベルの音が廊下に鳴り響いた。

とっさに私は耳を塞いだ。矢雲も同じように耳を塞いでいた。

数十秒するとその音は余韻を残しながら鳴り止んでいった。

私の耳にはまだベルの音が残っていた。ゆっくりと私は手を離した。

「あんな物に毎日俺たちは起こされていたんだよなあ」と、懐かしむように矢雲は言った。私はその呟きに正真驚いたが、しかしそのことは口に出さず、矢雲が私に掛け声と同時に走りだしたので、私もその後を黙って掛けて行ったのだった。

外は東の空がやっと明るくなってきたぐらいで、周辺はまだ暗かった。そのため私は周辺の様子を遠くまで確認することはできなかったが、それでも空中楼閣を建設していた現場だけは相変わらず目も眩むほどの明かりを発していたために、向かう先だけは見失うことはなかった。

現場に近付くにつれ、その前に多くの工員であろう男たちが集まっているのが見えた。そしてその中に社長の姿も見え、その隣には原田の姿も見えた。矢雲が彼らに近付いて行ったので、私もその後に着いて行った。社長たちの前に私たちが着くと、矢雲が社長に一声だけ掛け、そしてその場を後にして工員たちが集まっているところに向かって行った。

「これで全員そろったかね」 社長が原田の方を見て言った。

「はい。これで乗組員、総勢十八名、全員揃いました」 そう言つて原田はバインダーに挟んだ書類にボールペンでチェックを入れた。社長はそれを聞くと「よし、全員集合！」と声をあげた。工員たちはすぐさま社長の周りに駆け寄り、私の前にも何人が集まって、私は工員たちに取り囲まれる形になった。

社長が咳払いを一つした。

「みんな、今までありがとう。君たちのおかげでこの空中楼閣は何一つ無く問題を抱えることはなく、また大きな事故もなく完成させることが出来た。

そして今日、この楼閣を空に浮かばせることで、我々の仕事は完了する。まだ、我々の仕事は終わっていない。だから、この楼閣が空に飛びあがり、そして、はるか上空に浮かび上がったら、そこで打上げをしようじゃないか！」

工員たちの歓声が上がリ、私もつられて声を小さくあげた。社長はその歓声が静まるまで工員たちの顔を見て、そして静まり始めた頃になるとまた話しはじめた。

「そして昨日、突然の実家からの訃報により、ここから離れることになってしまった原田に対し、今までの働きに対して私から感謝の意を表明すると共に、亡くなられた原田の母に対して黙祷を捧げたと思う」

まだ少しざわついていた工員たちも話すのを止め、社長が「黙祷」と号令を掛けると、工員たちは静かに目を瞑り、私も目を瞑った。

静かな夜だった。音という音、何も耳に入ってこなかった。

何秒か過ぎて、社長が「止め」と号令を掛けた。私は静かに黙祷を止めて目を開けた。

社長がまた話し始めた。

「本当は原田に何か一言でも言つてほしいのだが、こいつはそういうのは苦手だと言つてばかりで、私にすらさよならの一言も言わないでさっさと実家に帰りたいらしい」

「そんなこと、そんなわけないじゃないですか！」

原田が焦りながら言い、工員たちはそれに笑い声をあげた。

「そこで、急遽ながら彼にやって来てもらった」

社長が私のことを呼んだ。私は工員たちの中から抜け出し社長の隣に立った。そこで私は初めて工員たちを対面することになったのだが、どういうわけか皆同じ顔のように見えた。背丈はそれぞれ違うのだが、顔はみな同じように見えてしまい、マネキン、そうだとそれにそっくりなんだと感じた。矢雲の姿を探そうとしたが、どういうわけか見付からなかった。隣にいる社長の顔には、相変わらずの無精ひげが生えていた。

「彼は今日から我々の一員である。我々と同じ、空中楼閣の乗組員である。みな、仲良くしてやってくれ。分からないことが多々あると思うから、その時は近くの奴でも教えてやってくれ」

工員たちがみな揃って返事をした。社長はそれを見て頷き、私は工員たちに向かってお辞儀をした。何故だか悲しく淋しい思いを感じて、そして私は頭を上げた。やはり矢雲の姿は見えない。私を知る人は、当たり前だがそこには一人もいなかった。一刻も早く、私は彼らの輪に入らなければならないと思ったのだが、どういうわけか顔が分からなくなっていた。こんなことは始めてだった。

「よし、それでは今から空中楼閣を打ち上げる！ 乗れない原田に空中楼閣がしつかりと空に浮かぶところを見せてやるうじゃないか！」

社長はそう叫ぶと、工員たち一同、それぞれ思いのままに声を張り上げてまだ灰色のシートで覆われている空中楼閣の現場に入って行った。私はどうすればいいのか、それに着いて行っているのかも分からず、頼るつもりで社長の方を見た。

「君はここにいれば良い。君には空中楼閣の中でやってもらいたいことがあるのでな」

社長がそう言って笑顔を見せた。私はそれに素直に従うしかなく、私はそこでただ待つことになった。

この間、マネキンのように見えた工員たちの顔を一人でも多く思いだそうと、もう少し丁寧な言い方をすれば彼らの顔に何らかの特徴を見いだそうとしていたのだが、それも元からマネキンのようにしか見えなかったのだから、それ以上の特徴づけは全く出来ず、そもそも名前も知らない工員の中で私が何をすればいいのかも分からないのだから、今私の心には空中楼阁への期待よりも不安の方が大きくなりつつあり、私は終始そのそわそわした感じを悟られぬように隠そうとしながら、ただひたすら待っていたのだった。

どういうわけか矢雲の姿が見当たらない、というより、もしかしたら私が矢雲のことを感知できずにいるのではないだろうか。

原田、矢雲、社長。面識のある者は三人だけ。その三人のうち二人が目の前から消えた。その思いがまた、私を不安に陥れ、どうしてだろうか、ハローワークにいた頃を思い出させた。ソファに座っていた時と同じ、あの画鋏を尻の下に仕込まれたときの嫌な物淋しい感じ、それが、また億劫になる。これだけの人がいるのに孤独、例え集団に属しても孤独、尻の下に仕込まれた画鋏を教えてくれる人もいない。

経験せずとも良い痛みを、どうして経験しなければならないのか。私は、いったい何をしてしまつて……、その気持ちが心で疼くたびに、私は億劫になる。

やがて、現場の中からベルの音が鳴り響いた。

「準備が出来たようだ」社長はそう言つて、現場の入口に向かつて行こうと歩き始めた。

社長が入口に着く前に、入口から工員が一人出て来て「全て完了しました！ いつでもいけますよ！」と叫んだ。やっぱり、マネキンのような顔だ。

社長は私の方を向いて手を振って私に来るように伝えた。私はすぐに社長のもとまで駆け寄り、そのまま社長の後を着いて行った。「やっと、夢が叶う」社長がそう呟いた。社長の嬉しさを隠せない

様子を見て、私も胸が躍るような気持ちになった。何故だかは分からない。内心、どこからそんな感情が生まれたのかは未だに分からない。ただ、一瞬だけ先ほどの不安が心から吹き飛んだことは確かであった。

中に入ればやっと完成した空中楼閣の全容を見る事ができるかと思ったのだが、そうはいかなかった。現場の入口から空中楼閣の入口までの間は緩い階段になって続いており、階段の周りはトンネルのように青いシートで全て覆われていた。だから、私は空中楼閣の全容を一度も見事無く、そのまま空中楼閣に乗り込むという、不可解なことになってしまった。

階段を上り終わると踊り場に着き、そこで一人の工員が待っていた。楼閣の入口は鉄製の扉で閉められていた。工員は「お疲れ様です」と社長と私に声を掛け、社長が「これで全員か」と言う、「はい」とだけ二人とも返事をした。

「よし、では三分後に打ち上げといこう！」

威勢よく社長は言う、そのまま社長の声は笑い声と変わっていった。そして楼閣の玄関となる扉を左にスライドさせて勢いよく開けて中に入って行った。開かれた扉の先はうす暗く、中の様子を見通せなかった。工員が「どうぞ」と言つて中に入るように進めた。

私はその冷たい感じがする異様なうす暗さにほんの少し怖気付いた。だが、扉を目の前にしてここから引き返す勇氣もなく、私はその感情を払拭出来ぬまま足を踏み出したのだった。非常に重たい一歩だった。

だがその一歩を踏み出して中に入ったとき、私の頭上で楼閣内の通路の天井にある白い蛍光灯が点いたので、私はついさっきまで心にあつた恐怖や警戒心は何処かへ消えてしまい、そして何故か胸を撫で下ろしたのだから、私は何か馬鹿にされたような、自分がただの阿呆なのかという感情に襲われて嫌悪感を抱いたのも、たぶん事実なのだろう。だが、私はその気持ちを否定しようとして、先ほどの社長の笑い声を頭の中で繰り返し再生していた。そして、先に入

ったその社長の姿は、どういうわけかどこにも見えなかった。

楼閣の入口となる扉を抜けると、左右に分かれる横幅一メートルもない狭いコンクリートの通路に出た。そして目の前には『乗組員室』という札が貼られた扉があった。その扉の横にこの楼閣の見取り図が張られていた。地図を見て、私はこの楼閣が円柱のような造りになっており、現在私がいる通路は楼閣をぐるりと円状に取り囲むように繋がっていることを知った。

また、ちょうど私のいる場所から通路を歩いて行き、ちょうど半周したところ、つまり玄関からちょうど裏側の場所にこの楼閣の二階に繋がる階段があることも分かった。一階の見取り図だけがそこには描かれており、二階の見取り図は描かれていなかった。

背後で扉が閉まる音が聞こえて振り向くと、先ほどの工員がそこにいた。私が声を掛けると、その工員は「失礼します」とだけ言うてさっさとそこから立ち去ろうとした。私が通路の先に走って行くこととする彼を呼び止めると、彼は振り返り「もうすぐ発射します。早く持場に行つて席に座らないとマズイですよ」と私に忠告した。

「その私の席はどこにあるんだ!？」

「知りません! これにて!」

「おい!」という私の声だけが廊下に響き渡り、そして彼はそのまま走り去って行ってしまった。

一人そこに取り残された私は、とりあえずどこかしがみ付ける場所を探そうとした。だが、通路はコンクリートで塗り固められた壁と床のために、デコボコはいっさいなく掴まる場所などなかった。

突然、非常ベルの音が数秒鳴り響いた。その間、私は耳を塞いでいた。

そして、私ははつと息を飲んで、またあちこちを見回した。

このままでは発射時の振動で私の体はあちこちに振り回されてしまう。垂直に空へ打ち上げられるロケットのような楼閣が安定した飛行になるまでには相当のブレが左右に生じるにちがいない。楼閣が急に垂直から傾けば、何にも固定されていない私は間違はなく宙

に投げ出され、この楼閣の壁や天井や床に叩きつけられることになる。

怪我することは間違いない。下手すれば死ぬ。

何かおかしい。そもそも、乗組員として此処にやって来たのだから、私の席が何処かに用意されているはずではないのか。

私はそう思い、『乗組員室』という札が貼られたドアの前に駆け寄ると、すぐさまコの字型の取手を掴み、ドアを勢いよく引いて開けようとした。

だが、ドアは開かない。引っかかったような音がして、今度は押してみたが、それでも開く気配は全くしない。

我を忘れて私は力任せになって何度も押したり引いたりしてみたが、それでもドアは全く動かない。

息を切らしながら私はそのドアに耳を当ててみた。すると中から人の声がかすかに聞こえた。複数人の笑い声も若干だが聞こえた。

私は声をあげて、ドアを引っ切り無しに叩いた。耳が痛くなるほどの金属音と自分の叫び声が、通路に響き渡っていた。

すると、中から声が聞こえた。私は叩くのを止めた。

目の前にあったドアは横にスライドして開いた。そして作業着姿の男が立っていた。

「何やってんだ、おめえ」

ああ、スライド式だったのか。私は息を切らしながら、口は開いたままだった。目の前にいる男はやはりマネキンのような顔、それでも目を丸くして私を見ていることだけは分かった。

「まあ、中に入れ。そろそろ出発だから」

「すみません」とだけ言っただけで私はその男と室内に入って行った。

私はどうしてしまったのだろう。何かおかしいのか。

何か、形容しがたい思いで心が潰されそうになり、同時に疲れがどつと出た。

「兄ちゃん、それはそいつの勘違いだつて」

お茶の入ったペットボトルを片手に持った作業着姿の男がそう言った。そして確認を取るためなのか、その男は室内で適当に時間を潰している他の男たちにそのことを聞くと、その何人かがそれに賛同していくつか声をあげた。

ペットボトルの男が言う。

「出発十分前になったらベルが鳴るんだよ。まだベルは鳴ってないだろ」

「いや、さっき鳴りましたよ」

私がそう言つたとその男は「本当か？」とだけ言つて、男たちにベルの音を聞いたかどうかを訊いた。鳴っていない、というのが男たちの答えだった。

「鳴ってないつてよ」

「でも確かに……」とまで私は言い、そして口を噤んだ。こんなことで言い争つても時間の無駄になる気がした。私は確かに聞いたのだが、ここで一步下がることが大人の対応だと思った。そして、あのベルの音はまた違う意味で使われているベルの音なのだろうと考え、私はそれで心に決着をつけた。

「まあ、そういうこともあるつて。兄ちゃん、さっきものすごく焦っていたしな」

男はそう言つと、私に背を向けてそのまま前方にいる数名の乗組員たちの輪の中に入つていった。そして彼らはガヤガヤし始めた。

私は入口のドアの横に行き、壁に背中を預けてベルが鳴るまで待つことにした。

円形に広がる室内、まるでコロシウムのような室内には私を含めてちょうど九人いた。壁は全て冷たい鉄筋コンクリートで出来ているようで、照明は天井に蛍光灯が二本一組で四か所に付けられており、窓がどこにもないので室内の風通しは悪く、はつきり言つと監獄よりはマシだとギリで言えるようなところだった。

鉄筋コンクリートの壁から黒いベルトが何本か出ていた。車のシ

ートベルトのような、そんなベルトがある箇所が一定の間隔を開けて十か所あり、私はまさかと思った。

まさか、あれで体を固定するのか。私はもしこの楼閣が水平に傾いた時のことを考え、背筋が寒くなる感じがした。あんな数本のベルトで体を支え、――いやここでは縛り上げると言った方が適切だろう――そんなことになったらベルトが腹や肩や関節の節々に食い込むことになり、その痛さで悲鳴をあげるに違いない。

監獄以下だ。壁に礫される監獄などどこにもない。

私はこの思いつきを信じたいとは思わず、だから別のこともすぐに考えた。この楼閣の資材置き場にベルト付きのリクライニングシートがあり、それをここまで運びこみ、そしてあの鉄筋コンクリートから出ているあのベルトでそのシートを固定するかもしれない。つまり、あのベルトは人間ではなく、シートを固定するための物なのだと考えた。

私はこの方がはるかに人間としてまともな扱いだと思った。その椅子が、例えば学校の教室にあるような椅子だとしても、それだとしても壁に直接縛りつけられるよりははるかにマシだと思った。

そして室内の中央からベルの音が鳴り響いて聞こえてきた。室内にいる男たちは話を止めると、音が鳴った天井の方に顔を向けた。

やがて「それではまもなく離陸いたします」という声が聞こえた。駅のホームのスピーカーから流れる声にそれは似ていた。感情というものがいつさい読み取れない声だった。

「よし、お前ら。配置に着くぞ！」

先ほどのペットボトルの男が言うと、他の男たちは威勢よく声をあげた。

そして、私の期待は見事に裏切られることになった。いや、想像通りだったと言っていい。男たちはそのままベルトが括り付けられている壁に近付くと、壁に背中を付けて手際良くベルトを閉めていき、壁に縛り付けられる格好、壁に自ら礫になっていった。

私は声も出せずにその様子を見ていた。何かがオカシイことはも

う分かっていた。だが、男たちはオカシイとは思わないようで、彼らの中には目を輝かせながらベルトをきつく閉めていく男までいるぐらいだった。

どちらがオカシイのかはもうこの場所では分からない。私はただ、今すぐにでも逃げ出すことだけが正しいような気がした。

「おい！ その新入り！ ボサボサしてないでさっさと配置に付け！」

ペットボトルの男が私に言った。「そんな！」と私は声をはり上げそうになった。だがそれよりも先に別の男が「そいつ、今日来たばかりだから何も知らないんじゃないのか！？」と言った。

「何！？ そうか！ よし分かった。いまそっちに行つてやる！」

ペットボトルの男はベルトを外して、私のところまでやってくると、私の腕を掴みそのままベルトのある壁まで連れて行き、そして私を壁際に立たせた。

「いや、その」

「いいから、全部やってやるから心配すんな」

違う、と私は言おうとした。壁際に縛られること自体がオカシイのだ。何かが違うのだ。そう、何かが違うのだ、このままではいけないと己の何かが喚いているのだ。

だが、ではどうすれば良いと誰かに訊き返されても、もうこの状況ではこれしか方法がない気もするのは確かで、結局私は反抗することも出来ずに、その男のされるがままになつてベルトを巻かれていった。

「痛っ！」と私は悲鳴を洩らした。ペットボトルの男が私の右肩から左腹の下までを縛るためのベルトを急にきつく縛りあげ、右肩と首筋の間らへんを擦り、さらにそこにベルトが食い込んだ。

一瞬、私は男を睨みつけた。男と目が合つと、男は口だけでへへツと笑った。

「おお、悪かつたな」という声を出した男、その男からの声は反省の色すら伺えない。その男はこれが私のためにしていることと思ひ

込んでしているに違いない。または、楽しんでいるのではないだろうか。そう思うと、私はこの男のことを蹴飛ばしてやりたくなった。だが、この男を責めることが出来るだろうかとも思った。この男も、すぐに私と同じく磔にされるというのに、私だけが磔にされぬことも、この場所に留まりたいのならもはや許されることではないのだらう。

時間が過ぎて行く。それから二度ほど、膝頭の下らへんと足の踝らへんを縛り上げるときに私は痛みに耐えることになった。「足はしっかりと固定しないと、抜けちまうと大変だからな」という声が、私の口を塞ぐためのガムテープみたいな役割をした。

私のことを縛り終わると、その男はさっさと自分のところに戻り私と同じようなふうに体を縛り上げ始めた。いま、自分がどうやって縛りあげられたのかが分からない私は、その男がベルトを締めるやり方を逐一見逃さずに見つめていた。

だが、見ない方が良かったかもしれない。手順は簡単、ただ何度もぐるぐるに巻きつける個所と、何回もきつく縛りあげる箇所、その二つしか縛るやり方は存在せず、見ていてもちっとも面白くない。その男も慣れているのか無表情で無造作にベルトで自分の体を締めあげていった。

それを見ていて私はふと思った。あの男、やはり私を縛りあげる時に少し楽しそうにしていなかったか、と。

だが、そんなことを考えている暇もなく、天井のスピーカーからベルが鳴り響いた。

鳴り終わると、チャイムが一つなり、そして先ほどの機械音が聞こえた。さっき聞こえた――それではまもなく離陸いたします――という音声があるまままた流れてきた。

その後すぐに今度は――では一分前になります――という音声があった。私と同じように縛りあげられた男たちの顔が引き締まった。目を瞑る者もいれば、唾を飲み首を大きく上下に動かした者、深く息をはく者もいた。

玄関の呼び鈴が鳴ったような音が突如した。

「すまーん。いまの間違いだからー」

スピーカーから社長の声が流れた。

作業員たちから笑い声が上がった。皆それぞれ今の放送を茶化しながら笑いあう。

私は笑えなかった。だって、そうだろう。これから空を飛ぶのだ、機械操作を一つでも間違えたら墜落、それは死と直結するはずなのに、どうしてそれが彼らには分からない。

「あと10分で離陸するから」という社長の声がスピーカーから流れた。

「じゃあ、あと10分我慢していますか」

ペットボトルの男がそう言った。みなそれに賛同する。

冗談じゃない、と声を上げる奴は誰もいない。もう、乗りかかった船、ではなく乗りかかった空中楼阁だと私は思い、声を上げるのを諦めた。

すぐにこの室内はうるさくなった。磔にされた作業員たちが茶化しあっていた。「お前の姿は笑えるな」「やっぱり顔がいいと磔も似合うんだな」そんな声が聞こえているなか、私は一人この空中楼阁についてまた考え始めていたのだった。

そして、昼ごろに自宅にて広辞苑で調べた空中楼阁の意味、これだけにはならないでほしいと願いながら私は時が過ぎるのをただただ待っていた。

あの頃が懐かしかった。もう戻れないような気もした。

空中楼阁 — 蜃気楼 しんきろう

広辞苑 第六版より引用

ベルの音が鳴った。たった十分でも長く感じられた。

この十分間、私は目の前で礫になった男たちについてまずは考えようとした。

まずは、私のことを縛りあげたあの男。あの男は、私のことをベルトで縛るとき、何やら楽しそうな顔で私のことを縛りあげていたが、それはそういう性癖があるのだろうかということ。だが、顔が未だに分からない。

皆マネキンのように見えていようが、声の区別は出来るということも彼らの声を聞いていて分かった。人間は良くできている生き物だと一人勝手に感心した。視覚情報がなんらかの障害によって失われようとも、その他の器官が変わりに何かを補おうとするのだろうか、今の私は耳が良く透っていた。だからといっても、誰が誰だか分からないのは確かで、何の解決にもならない。せいぜい、私の真正面にいる男は極端なガラガラ声であるということ、その左隣にいる男は高く甲高い声でソプラノも発声出来るのではないかと私に思わせたということ。彼らを覚えるには、結局のところ名前がいるのであり、やはり考えるだけ答えの得られぬ、徒勞に終わることになった。

そういえば矢雲はどこへ行つたのだろうか。此処にいるのだろうか。

しかし、いたとしても何と声を掛ければいいだろうか。もう私のことなど忘れているのではないだろうか。

名前を知っている、これでは同じである。

その前に、私の目がおかしくなったのか、それとも周りの男の顔たちがおかしいのか。どちらかだけははっきりさせたかった。

だが、そのことを確認する術はない。私は、自分の目が異常ではないということを信じることにした。

それから次々と取るに足らないことを次々と考えながら私は時間を潰していた。それは本当に取るに足らないことで、いわゆる下種

野郎、スケベなことである。

どうしてこんなことを考えているのだろうか、何かに似ていると感じ、思い付いたのが電車の座席に座っている感じに似ているということだった。本も読まずにただ座っていると、自然と周りの様子を注視し始める。それに飽きると、男はだいたい妄想にふける。その妄想のほとんどがどうせ叶わぬ夢、スケベなことに費やされる。

それを振り払うには簡単で、誰かと一緒に電車に座ればいいのか、そう、目の前で談笑を広げている男たちのように。そうすれば、妄想などする暇などない。

そして、それが叶いそうもない私は、ただ妄想をするのみである。ハローワークの椅子に座っているときも私はこんな妄想をしていただろうか。

何かに待たされている時だったせいか、行き始めの頃は待ち時間が異様に長く感じて腹を立てたことは覚えている。何回も通ううちに身体共に慣れてきたせいか、ただそこでぼんやりと待つようになったのはいつ頃からだろうか。

ぼんやりと待っていた頃は、急に淋しいような恐ろしいような、何か黒い靄のようなものが心にかかっている、それを振り払うことに神経を集中すると、今度は脇をくすぐられたような感覚が起きて、それを堪えると、あとは何も無く、けれども不意にわき腹に張り手を食らわされるような、そんな感じに似た衝撃を心に受けたりして、つまりもう、不可解すぎてわけが分からない。

そんな日も過ぎて行けば、考える事を止めるのだろうか。現に私は何も考えないように心がけながらぼんやりとソファに座って待っていた気がする。

しかし、考えたところで、やはり先ほどのような怪物が私の心を襲うのだから、だから私はもう情性や墮落やそういった物が当たり前のように感じていた、のかもしれない。

結局、私一人が何をしようとも、社会が受け入れる事がないのだから、もう全てが無駄であり、ならばいつそのこと、私を拒絶した

社会にひたすら反抗するということだけが私に残された手段のように感じてしまったのだから、だから、私はあえて職を選ぶという自虐的で嘲笑的な思考から離れられなかったのかもしれない。

だが、それすらももうどうでもいい。どこで何を間違ったのか、私はこのわけの分からぬところに来てしまったのだから。

でも、ここに懂れてやって来たのも確かなのだ。

私はいつたいどこで勘違いを始めたのか。私は生まれつき持った脳みそを恨めしく思う。お前がもっとしっかりしていれば、私はこんなことに巻き込まれずに済んだはずなのだ。

脳みそもいつのまにかネガティブになっていた。考える事が悪い方向にしか進んでいかない気がした。もし手が自由ならば、私は自分の頭をコッソンと叩いて「しっかりしろ」と言いきかせたことだろう。

ベルが鳴り終わると、すぐにスピーカーから女性の感情無き声が流れた。

――それではまもなく離陸いたします――

その声が途切れるとすぐにガッソ、という重たい何かと何かが連結するような音が足下から聞こえた。私はその音に一瞬、心臓が圧迫される感じを受けた。

「いよいよ打ち上がるぞ！」と誰かが叫んだ。威勢の良い返事が乗組員一同からあがり、マネキンのような顔だが、皆、顔が引き締まっているように見えた。

カウントダウンが始まる、と私はそう思った。

ところが、急に轟音が足下から鳴り響くと建物全体が揺れ始め、私の視界は大きく揺さぶられた。足元から伝わって来る振動によって私の足は大きく揺さぶられ、その度にベルトが食い込んだり弛んだりして、私は声にもならない悲鳴を数回上げた。

「だれだ！ 変な呻き声を上げやがった奴は！」

「ちくしょう、いてえ！」

「おい、皆同じなんだ！ 我慢しろ！」

そんな声が聞こえた。そしてすぐに耳鳴りがした。一瞬だけ何も聞こえなくなった。

心臓が圧迫されて苦しい。エレベーターで急上昇するときのような、いやこれは急降下するときのような感覚に似ている。息が勝手に止まっては、口でなんとか呼吸する。肺が縮まったようだ。胃の中身がぐるぐると回り始めた気がして、戻しそうになり口を強く締めた。

少しだけ体が浮いた。すぐに足は地についた。それがもう一度あった。

果たして飛んでいるのだろうか。窓の無いここでは外の様子も見る事が出来ず、果たしてこの塔が打ちあがっていることすら疑わしい。

空中楼閣が少しずつ斜めに傾いていくように感じられた。体が少しずつ後ろに引っ張られていった。背中にべったりと壁がくっ付き、ひんやりとした感触が伝わって来た。

「ぎいあああああ！」

そんな悲鳴が聞こえた。ちらりと目だけでそちらを向いた。

一人の男が苦悶な表情を浮かべていた。作業着の上からだ、右肩と右肘、それに首の右側に強くベルトがくい込んでいた。

「おい！ 俺だって辛いんだ！ 一人だけ叫んでんじゃねえよ！」

今度はそっちを向いた。その男は左肩と左足首にベルトが強くくいこんでいた。大きな振動があるたびにベルトが擦れ、皮膚まで擦れたのか、作業着が赤く染まりはじめていた。

私は地獄絵図を思い出した。苦悶の表情を浮かべながら地獄で鬼たちの拷問を受けている罪人たちの姿と、目の前で絶叫を堪えている男たちの姿が重なりあう。縛りあげられた罪人は鬼の金棒によって滅多打ちにされ、血を噴き出してがっくりとうなだれる。

だが、地獄絵図とは違う、男たちの前には鬼もいないし、男たち

は生きている。彼らに苦痛を与えているのは誰だ、誰もいない。憎むべき鬼もいない。そして、空中楼閣が少しかだけ傾きを修正し始めると、彼らは、安堵の表情を浮かべる。その中には恍惚とした表情まで浮かべる者さえいた。

狂っている、何もかも狂っている。

私はその男たちのことより、私自身がそのような痛みに晒されること、嫌だ、嫌だった。みつともない、男が泣き声をあげてまでやらなければならないことがあるだろうか。

「操縦！　しっかりやれよ！」

誰かが怒りに満ちた声で叫んだ。

「何言つてんだ！　あっちだって必死なんだ！」

また誰かが叫んだ。

「ちくしょう！　足がいてえよお」

誰かが悲痛の声を洩らした。

「みんな辛いんだ、大丈夫だ」

私の隣にいた奴が声をかけた。

何が辛いんだ。私はそう思った。この男も私と同じ、まだ苦痛を味わっていない。ただ、彼らと同じ状況下に晒されながらも見ていただけ。助けることも出来ずに。

私は願っていた。もう傾かないでくれと。傾くならどうかあっち側に倒れてくれと。

隣の男も同じようなことを思っているに違いない。被害者の身体を心配するような、そして憐れむような、そんな目つきで彼らを見ているに違いない。

心臓の圧迫には慣れない、相変わらず呼吸は整う様子はない。爆発音がした。足元が揺れ、私は何度も足が浮いた。

また空中楼閣が傾き始めた。一瞬だけ身がすくむ、また心臓が圧迫される。

徐々に、向かい側の男たちの苦痛の音が漏れ聞こえてきた。

私は考えることを止めたい。目を閉じて、ただ祈った、祈る、無

事であることを。

自力で塞げない耳が恨めしい。彼らの呻き声がいつまでも頭の中に響いている、そんな気がしてもどかしい。本当に彼らはまだ叫んでいるのだろうか。それすらもう分からない。分かりたくもない。だから、祈る、祈りの言葉を頭の中で唱えていた。その声をかき消すために。

時は経ち、発射時に比べての揺れはほぼ無くなり、空中楼閣は安定飛行に入ったように思われた。足元から未だに振動が小刻みに伝わってくるが、発射時と比べたら気になるものでもない。空中楼閣が左右に傾くことも無くなり、誰かの悲鳴は消え、安堵の声がちらほら聞こえるようになっていた。

私は目を閉じたまま、耳だけで今の様子を確認しようとした。聞こえてくる音は男たちの安堵に満ちた声と、それに対して注意を促す声、油断を恐れる声や、冗談を言って笑いを求める声も聞こえた。目を閉じた時から、私は一度も目を開けようとはしなかった。彼らの苦痛から目を背けたかのように目を閉じたため、彼らの悲鳴や呻き声が収まるまで目を閉じていなければいけない、そんな気がしたからである。

よくよく考えてみれば、危機迫る状況であつたとはいえ、縛りあげられた私が出来ることと言えば、口を動かし話すことと、目を閉じること、それに四肢をみつともなくばたつかせることぐらいしかなかったのである。

そんな状況の中で私は無意識のうちに最善の策を実行していたらしい。

それは、祈る、ただそれだけである。

自分の身に彼らと同じ苦痛が降りかからないように祈っていると、同時に彼らの無事も祈る余裕が心に出来上がっていた。

今、冷静になってこうして過去を考えられるのも祈りのおかげな

のかもしれない。

彼らの悲鳴や呻き声は、目を閉じてからより鮮明に聞こえるようになった。私が見えないだけ、その声は私の頭の中に深く響き渡り、私は勝手に彼らが苦しむ姿を想像した。ベルトが擦れて血が滴り落ちるような光景も思い浮かべた、ベルトが首に絡まり、カエルの呻き声を出しながら青白く変形していく乗組員の姿を思い浮かべては、その男がそうならないように祈ることにした。

同じ状況下で、私は祈ることが楽しみとなっていた。まるで、彼らより数歩も先を歩んでいる聖人のような気がして、ふざけているが、優越感を味わっていた。

彼らの苦痛が私の楽しみとなっていた、というのが本当なのかもしれない。実際、彼らが苦しんでいる間、私は一度も苦しむことなく、ただそこで祈ってばかりいたのだから。

祈ることも飽きれば、私は望んだ。彼らにもっと苦痛が降りかかるように。そして、それに対してまた祈るのだ。

いつのまにか私は悪魔となっていたのかもしれない。しかし、そんなことはどうでもいい。それよりも、早くこのベルトを外してほしいと私は願っている。

そうすれば、こんな聖人ごっこも終わるのだ。

私は、目を開けるタイミングを失ったようにも思っていた。目を開けることが怖い、開けた時、傷ついていない私を羨む目つきが刺さりそうで、それが怖いのだ。目を開けた時、人が死んでいたらなんとさえいいのだ。

私は、祈る。無事を、みんなの無事を。

チャイムの音が鳴り、マイクの入る音がスピーカーから聞こえた。

―― 空中楼閣は安定飛行に入りました。皆さま、お疲れさまでした。ベルトを外しても大丈夫です。しばらくの間、この飛行が続きます

ので、どうぞごゆっくり――

歓声が上がった。

私は目を開けた。

身を震わせて叫ぶ男たちの姿が見えた。涙ぐむ者もいた。

皆一様にベルトを外しにかかった。両手両足が縛られているにも関わらず、どういうわけか難なくベルトを外していく。器用にベルトを外す者もいれば、力ずくでベルトを引き裂くように外す者もいた。誰もが外すことにだけ集中していた。

私もさつさと外そうとした。とりあえず両手を前に力を込めて引っ張ってみたものの、ベルトはピンと張るだけで解けそうにもなかった。同じように足にも力を込めてみたが、やはりベルトは解けそうにもなく、私は力を抜いた。

私がこうしている間、四肢が解放されて喜び歩いている者が何人が現れていた。解放された者同士で手を取り合い、肩を組んで高らかに笑い合う姿が見られた。

私は早く解放されたいというもどかしい思いにとらわれながら、彼らの誰か、特にペットボトルを片手に持っていた男によって私は縛りつけられたのだから、特にその男の手によって早く解放されたかった。その男がどこにいるのか分からないが。

しかし、彼らは自分の身が解放されると、すぐに近くにいた者と歓喜を分かち合い、その歓喜は次第にそのまた近くにいた人間を巻き込み、気がつけば私を除く全ての者が解放されて、一つの歓喜の輪みたいな物を作りあげようとしていた。

このままでは、私は一人このままにされてしまうのではないだろうか。

私は堪らなくなり叫んだ。早く解放してくれと叫んだ。

しかし、男たちは私の叫び声に気がつかなかったらしく、誰も私の方を振り向かなかった。

私はもう一度叫ぼうとした。

するとある男が私のことを指差して言った。

「おい、いつまで張り付いてんだ！ さっさと解いてこっち来いよ！」

「解き方が分からないんですよ！ 誰か助けて下さい！」

私がそう言つと、一同揃つて哄笑した。

「おい、あいつ、解けないんだつてよ」

「おもしれえ野郎だなあ。あのままにしといてもいいんじゃないの」
私は「そのままでもいい」となど言つた男を睨みつけた。男はそれを見てまた笑い、周りの者もそれにつられて大笑いした。

「まあ、まてつて。新入り。いま、解いてやるからよ」

ある男がそう言つてこっちに近付いて来た。私の目の前にまでやつてくると、すぐに右手に巻かれたベルトを掴み、あちこちといじくり回した。

「やつぱ、駄目だ。おまえはこのまんまだな」

その言葉を聞いた者たちがまた大笑いして、「そりゃ酷いな」と冗談を言い合い始めていた。

私はその言葉に怒りを覚えたが、同時に恐怖も感じた。蝶々の標本をふつと思ひ出した。

「冗談だ、怖い顔すんなつて」

そう言つて男はまたベルトをいじり始めた。

すると、どういうわけかベルトがするすると解けていった。私の右手が解放され、私は胸を下ろした。

やがてその男は、左手、右足、左足とベルトを次々に解いてくれていった。

そして私は自由の身となった。久しぶりの自由の身に叫びたい気持ちになった。解いてくれた男に感謝の言葉をかけ、手を取り合つて成功と無事を祝つた。

男が言つた。

「いやいや、とりあえずおめでとうだ。今すぐビールがここに運ばれてくる。話はしれからだな」

「いやいや、ずっとこのままかと思いましたよ。そういえばあなたのお名前は？」

私の言葉を聞くと、男は少し怪訝そうな顔を見せたが、すぐに表情を戻してにこやかに言った。

「矢雲ですよ。朝、会いませんでしたか？」

私は内心驚いたが、それをなるべく顔に出さぬように言った。

「ああ、そうでした。いやあ、まだ嬉しさのあまり少し混乱しているようで」

「しっかりして下さいよ」と言って矢雲と名乗った男は私に背中を向けて、先ほどの輪の中に戻って行った。

私は矢雲という男に会ったことは確かに覚えていた。が、顔が思い出せない。

これはどういうことだろうか、皆同じように見える顔。

だが、矢雲という名前を知れただけで良かったと思った。これで心おきなく困ったら矢雲に聞くことが出来る。自分が少しだけ強くなれた気がした。

歓声は未だに止むことはなく、男たちは未だに騒いでは歌っていた。

私は少し距離をとってその光景を眺めていた。歓喜が起きているに違いない。笑顔なのは分かる。だが、顔が分からない。顔がマネキンのように不気味に思えてしまい、私はどうしてもその中に入ろうと出来なかった。

私は彼らの顔を見分けようとした。まずは矢雲が何処にいるのかを探そうとした。

しかし、分からない。背丈や格好も皆同じように見えてきて、私の頭がついにおかしくなったと考える方が賢明な気がした。

しかし、果たしてそうなのだろうか。私に一体、何があったのだろうか。

思えば、この空中楼閣に乗り込む前、私は原田の顔をしっかりと認識出来ていたはずだった。では、どうしてこの男たちのことが判

別出来ないのであらうか。

矢雲は何処だ。私は歓喜の輪の中にいるはずの矢雲を探そうとした。

入口のドアが急に開いた。

ドアから現れたのは社長だった。

「社長！」

叫んだのは私だけだった。男たちは社長が来たことに気がつかないのだろうか、未だに騒ぎ続けている。

「いや、長かった。長かった。長かった……」

社長はずっとそう繰り返して言い続け始めた。

「社長！」

また私は叫んだ。どうも社長の様子が可笑しいのだ。社長の顔から表情がまるでないのだ。まるでマネキンのようだ。

すると、社長の無精ひげがゴマ粒のようにポロポロと地面に落ちていった。だが、社長はその髭を気にすることもなく、今度は違うことを呟き始めた。

しかし、周りの歓声がさらに大きくなっていき、社長の声が聞こえない。

私は社長に近寄った。社長は自動マネキンのように口だけを動かしている。

「すまない、すまない、すまない」

私はかろうじてその呟きを聞くと、何がすまないのかが気になった。社長の無精ひげはほとんど落ちて、青白い顎が綺麗にてかりながら見えていた。

さらに歓声は大きくなり、まるで夕方の商店街のようなざわめきのようだ。威勢のいい声があちこちで聞こえ始め、私はあの男たちが何を離しているのかが検討もつかない。

私はその歓声に負けぬように社長に言った。

「社長、何があったんですか！」

その時、ドーンという音が聞こえた。大太鼓を叩いたような響き

を残したその音は、余韻を残したままもう一発鳴り、私はどこから鳴ったのか分からずにうろたえた。

急に体が軽くなった気がした。

心臓が急に苦しくなった。胃が急にごろごろとなり、私は息が詰まった。

なんだこれは、と思い私は辺りを見回した。

気がつくと、男たちの動きはスローモーションになっていた。それでも彼らは騒ぎ続けている。気がつけば、いつの間にか片手に酒を持っている。

乗組員室のドアの先に空中楼阁から外へ出るためのドアが見えた。そのドアが開きかけていた。すき間から光が差し込む、

次の瞬間、扉が一気に開いた。と思うと、大きな目玉がぎよりとこつちを見ているではないか。

私はうわあ、と言って腰を抜かした。その目玉と私の視線があった。

何を驚いたのか、その目玉の持ち主は「ぎゃあ、ぎゃあ」と鳴いてそのまま空の彼方へ飛び立っていった。

その後ろ姿はカラスだった。巨大なカラスだった。

「何だよ、あれ！」

私が怒鳴ると、社長が口を開いた。

「私たちは小さくなっているんだ。けれど皆にはそのことは知らせていないんだ」

私はその言葉を聞いて呆然とした。何を言っているんだ。人間が小さくなっているだと。

「私は、人間事態が小さくなればいいと思っていたんだ。だが、実験は失敗した」

社長は誰の方も見ずに話を続ける。

「つまり、空中楼阁など無理なのだ、創ることなど出来ないのだ。それは、エリマキトカゲやツチノコを信じたあげくに作りあげるのと同じぐらい愚かなことなんだ。」

だが、創ろうと思えば出来るんだ。今の現代科学を結集させれば、創れないことはないのだ。ただ、あまりにも馬鹿らしくて誰もやらないだけなんだ。

ならば、空中楼阁も創ろうとすれば出来るのだ。ただ、人間を乗せることは不可能だ。ただし、体積を軽くすれば、可能だ。浮かび上げるためのモーターもプロペラも、空中楼阁が小さければ可能だ。浮かび上げることが出来る。

人間が小さくなればいいじゃないか！」

「ふざけんな！ それじゃあ、人間はどうなるんだ！」

私は堪らずに叫んだ。怒りや憎しみ、悲しみに寂しさ、訳の分からない物。

自分が知らぬ間に小さくなっていただと。どういうことだ。なんでだ、なんでだ。

叫んだ私を見ずに社長は私の叫びに反応した。

「私だって人間だ！ 家族がいる、働かなければ、はたらかなければ……」

急に全ての者が浮かび上がり、私も体が急に宙に浮くと、そのまま自分の体を制御できずに、やがてくるくると回り始めて、そしてそのまま入口に吸い込まれるように

私は空中楼阁の外に投げ出された。

すぐに目の前に一面の青い空が広がった。

体の自由が効かず、半回転して、空中楼阁が見えた。

そこにあつたのは、グラグラタワー、私が子どもの頃に遊んだ玩具にそっくりの建物。

私は手を伸ばした。そのグラグラタワーの方に。

けれども、それは私より早く落ち始めた。私の前から少しずつ下に消えていく。

「お前は失格だ！」 グラグラタワーの方からそんな声が聞こえてきた。

私はそれを聞いて頬が緩んだ。こちらからお断りだ、と叫び返し

たかった。

そして、私は一気に地上へ落ちていった。
ありったけ何かを叫んで叫んで、叫んで……

気がついたら、私は自室にいた。いつものアパートの一室だ。

外はもう明るくなっている。カーテン越しに入ってくる光が眩しかった。

近くにあった時計を見て、どうやら朝だということが分かった。
テレビが点いていた。地元の商店街を紹介する朝の番組が放送されていた。大した音量ではないのに、レポーターの後ろにいる群衆が騒いでいるせいでやかましく聞こえた。

なんだよ、これ。と私は思った。私はゆっくりと体を起こした。
あれは、夢だったのだろうか。背中にはびつしりと汗を掻いていた。

しばらく私は呆然としていた。何が起きているのかを把握しなかった。

夢にしては覚え過ぎている。

私は普段使わない電話機の元へ向かった。

着信が入っている。私はぎょっとした。やはり夢ではないのか。
留守番電話に一件の着信メッセージが入っていた。

―― おまえかい。職は見付かったのかい？ 見付からないのなら今からでも遅くないからうちに帰って来て家業を継いでくれや。うちの家業は確かに稼ぎはよくないけど、それでも貧乏はしないよ

私は途中でそのメッセージを切った。

もうたたくさんだ。俺は、そんな辛い思いをするために生まれたんじゃないんだ。

俺はもつと稼いで、そして人より裕福な暮らしをするんだ。だから

ら、俺はデカイ会社に勤めて、安定した生活を、そして、そして、俺は……。

空中楼阁 ― 空中に現れた楼阁のこと。楼阁とは高殿のこと。

空中に高殿を創れば、何を以て此処を低き地と決めることが出来ようか。

故に、無駄なり。創れば、永遠に高きを望むことになる。

やはり、あれは夢だったに違いない。私はそう結論づけた。

目覚めた後、起きたところで大した予定も無い私は、とりあえず部屋の中で時間を潰し、そうしているうちに気がつくど昼過ぎになっていた。

朝飯を食べる気にはならなかった。しかし昼頃になると腹が減り、何か食べようと思い、外出することにした。とはいっても、何かこれを食べたいという考えはなく、いつものように駅前に向かえば、何処か店に入るだろうという考えだった。

駅前に向かう最中、電信柱に貼紙を張り付けようとするおじいさんに出会った。

― 求む、雀士。空中楼阁まで ―

私はその貼紙に書かれていたそのキャッチコピーを見て無性に腹を立てた。このじじいだったのか。元はと言えば、この貼紙のせいで私はあんな悪夢を見たに違いない。

貼り終わり去ろうとするじじいを私は呼び止めた。

「おい、なんだこれは」

じじいは私の方を向くと「ああ」と言って、のろく話し始めた。

「儂のやっている雀荘の求人広告でな。最近、若い奴らは雀荘にこないでいっつもゲームばかりしているそうだから、若い雀士がいないのだよ」

「それと空中楼阁となんの関係があるんだよ」

「空中楼阁とは儂の店の名前だよ」

「店の名前だ？」

「そう、店の名前。格好いいだろ」

私はそのじじいの言葉にいちいち腹を立てては、すぐにでも殴りたい衝動にかられたのだが、しかし私はそれをじつと堪えて、そしてじじいにきつい口調で言った。

「くだらないビラなんか貼ってんじゃねえよ。無許可だろ、どうせ剥がす方の身にもなって見ろよ」

じじいは私の言葉を聞いて少し目を開くと、悲しそうな表情を浮かべて言った。

「そうだなあ。結局、昨日貼ったビラも剥がされていたしなあ。せっかう孫に作って貰ったビラだったのになあ」

「孫なあ？」 あ の ビラ は この じじい の 孫 が 作 っ た の か 。

「ああ。もう高校生になったばかりでな。儂の雀荘に友達を連れて来ては、そこでゲームをピコピコし始めるんだが、麻雀よりそっちの方が楽しいというのでな。どうせ平日の夕方に客など来ないから雀卓に座らせてやらせているんだが、その孫が作ってくれたんだ。

本が好きらしくてな。教科書に載っていたらしいんだ、この空中楼阁っていうタイトルの小説が。ええつと、なんて言ったっけなあ、作者の名前は。忘れてしまったなあ。さっき読んだばかりなのだが」

「盗作じゃねえかよ、それ」

「ああ、その小説に出てくるキャッチコピーをそのままビラに書いて貼ったと聞いたときは驚いた。儂もマズイと思って夕方になつて剥がしにいったよ、すぐに。朝、登校する時に一枚貼ったと言ったのだが、探しても見付からん。結局、諦めたよ」

「で、それを今度はじいさんが貼り直しているのか」

「いや、キャッチコピーを少し変えた。それが、このビラだ。

小説を読んで、確かに頭に残るキャッチコピーだった。これほど人の目を引くキャッチコピーなど、そうそう見ることもできんだろう。しかも、店の名前と同じだ。

だから、貼れば少しでも僕の店を知ってもらえると思ったんだが「そう言ってじじいは俯くと、「駄目かあ」と小さく呟いて黙った。私はこのじじいをじくじくと痛めつけるつもりだったのだが、じじいの話を聞いているとその気も失せていき、いまはもう何も責める気にもならなかった。「そんな店、止めちまえよ」とこのじじいに言えば、このじじいがその言葉を本当に受け入れそうで、それが何か後ろめたい気がして言うのを躊躇った。

「おい、どうして空中楼阁って名前にしたんだよ」

私が夢の中でまで振り回された空中楼阁。どうしてそんな店の名前にしたのかが知りたくなった。

じじいは少し唸って、口を開いた。

「忘れた。ただ、麻雀とは、空中楼阁を築くような物だから、そう付けたのかもしれない」

「空中楼阁を築く？」

「そうだ。たった十四枚の牌を誰から見ても綺麗に揃えるほど高得点になる。多くの人を唸らせるような手が出来れば高得点になるのだが、一枚でも欠けたらそれはただのゴミだ」

「そりゃあ、そうだよなあ」

「そうだが、この続きを思い出せん。確か、えらい人が昔言っていたことをそのまま鵜呑みにして、それでこんな店の名前にしたんだ。すまん、忘れた」

「そうか」とだけ私は言い、そして黙った。

私は心の中で深い溜息をついた。じじいはさつさとこの場を去りたそうだった。

私が「じゃ、すまなかったな」と言った。

じじいは私に「じゃ」とだけ言っ、そのまま去って行った。私

はじじいが曲がり角を曲がって見えなくなるまで、その後ろ姿をじっと見ていた。

じじいの後ろ姿は、何かもう諦めているような思いを抱いているような、そんな後ろ姿に見えた。私はその後ろ姿を見ていて何故か悲しくなった。泣きたくなかった。

理由は分からない。別にあのじじいに同情したとか、そんなつもりは一切なかった。

ただ、あのキャッチコピーについて私と同じ感情を抱いていたことが、少し嬉しかった。そうだ、あのキャッチコピーはすごいはずに違いない。

くだらない自信だと思った。だが、自分が認めた物が他人にも認められていたということを知った時、何故か嬉しかった。理由は分からない。

分からないだらけだ。泣きたいのに、悲しいのに、嬉しい気持ちもある。

そして空を見上げた。あるはずのない空中楼閣をなんとなく思い浮かべた。

空中楼閣とはどういうものだろうか。それは、はたまた高度数万メートルに浮かぶ素敵な楼閣なのか。それとも、ただ浮遊するだけの廃墟なのか。

古代オリエントの時からあるとすれば、それは何色だろうか。石、岩、はたまた赤いレンガで出来ているのか、それとも瓦屋根で白い城壁を持つ建物であろうか。

それとも近代産業革命の時に浮かび上げられた巨大な軍事施設だろうか、天体観測所だろうか、それともただ、そこに一人の人間が住みたいだけのために造られた高き塔だろうか。

考える事は無駄なのだろうか。そんなことより、私にすることがあるのだろうか。

無理に考えを纏めて、駅前へ行くために私は歩き始めた。
夢の中で出会ったマネキンたちはどうしているだろうか。原田、
矢雲、社長。お前らはまだ元気だろうか。

何を考えているんだ。たかが夢の中の出来事じゃないか。
そもそも、あいつらは誰だったんだろう。

ああ、そう言えば、大学にそんな奴がいたなあ。確か、いた。
一度しか会ってないはずなのに。すごい奴らだ。俺の夢にでるだ
なんて。

あいつらは一体何をしているんだろう。俺と同じような人生を送
っているだろうか。

駅前について、空を見上げた。

空中楼閣はやはり見えなかった。

だが、それがいい。見えたら、いけないんだ。
あの雲の先に空中楼閣がもしあったら、それはそれは素敵じゃな
いか。

それでいいんだ。さあ、昼飯を何にしようか。

空中楼閣 ― 誰もが空を見上げて一度は思い浮かべるであろう
空に浮かぶ楼閣のこと。

実在はしない、それでも何故かふと思い浮かべて
しまうこと。

（後書き）

ご拝読ありがとうございました。

何かご意見、ご感想あればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1749u/>

空中楼阁 Remix [Modern literature, perhaps. Remix]

2011年6月18日18時10分発行